

IUFRO-J NEWS

No. 98 (2009.11) —

IUFRO 国際研究集会「多目的森林管理—気候変動時代における 持続可能性の戦略—」の開催

東京大学大学院農学生命科学研究科 龍原 哲
森林総合研究所四国支所 小谷英司

はじめに

2009年9月20日から25日にかけて、国際研究集会「多目的森林管理—気候変動時代における持続可能性の戦略—」(International conference on multipurpose forest management: Strategies for sustainability in a climate change era)が新潟市の朱鷺メッセにおいて開催された。1997年のCOP3(第3回気候変動枠組条約締結国会議)で京都議定書を議決して以来、森林が有する二酸化炭素吸収機能をより詳細に評価したり、二酸化炭素吸収機能を発揮させるための持続可能な森林経営の手法に注目が集まっている。2007年にはオーストラリア政府が「森林及び気候に関するグローバル・イニシアティブ」を出し、炭素循環に重要な持続可能な森林経営の促進と新しい森林計画の支援を打ち出した。また、気候変動によって強力な台風が発生したり、病虫害や森林火災が発生しやすくなることが予想され、森林被害が世界的に拡大することが懸念されている。このような状況から森林管理に対しても従来のやり方を見直すとともに新たな手法の開発が必要となってきた。2004年10月に宇都宮市で開催された国際研究集会では次世代のための森林の役割について討論された。今回は一歩進んで、気候変動というこれまで経験したことがない事態に対して攻守両面から積極的に対応し、森林のもつ多面的な機能を発揮させつつ森林を持続的に管理していくための戦略

について意見を交換するため、国際研究集会を開催することとした。

2008年3月29日に山本博一(東京大学)を委員長、吉田茂二郎(九州大学)を副委員長、吉本敦(東北大学、現在、統計数理研究所)・山本一清(名古屋大学)・長谷川尚史(京都大学)・広嶋卓也(東京大学)・小谷英司(森林総合研究所)・龍原哲(東京大学)を委員として、多目的森林管理に関する国際研究集会組織委員会を発足させ、開催の準備を行ってきた。この国際研究集会はIUFRO第4部会、森林計画学会のほか、日本森林学会、森林総合研究所、新潟県庁の後援によって開催された。参加者は国内から67名、海外から46名、総勢113名で、韓国からの14名をはじめ、オーストラリア、カナダ、中国、デンマーク、フィンランド、ドイツ、ガーナ、インドネシア、イラン、韓国、ニュージーランド、ポーランド、南アフリカ、スリランカ、台湾、タイ、イギリス、アメリカ合衆国などアジアを中心とする世界各地から参加者が集まった。国内の参加者には、国内の大学に在学しているバングラディッシュ、ガーナ、インドネシア、イラン、ミャンマー、ベトナムなどからの留学生11名も含まれる。

9月20日の夜、朱鷺メッセ2階にある「ちょこざいや結」でアイスブレイクが行なわれ、本集会が始まった。9月21日から23日までは朱鷺メッセ3階にある中

会議室において基調講演 5 件、それ以外の口頭発表 25 件、ポスター発表 45 件の合計 75 件の発表が行われた。9 月 21 日の夜は居酒屋「坐・和民」新潟駅前東大通り店で、22 日の夜はレストラン「アペティ」で懇親会を行った。9 月 21 日には同作者プログラムを実施し、イギリス、アメリカ合衆国から来られた同作者 2 名の方が参加した。新潟市内にあるラムサール条約登録湿地の佐潟で水鳥を観察した後、新潟市郊外にある弥彦山、弥彦神社を訪れた。その後、9 月 24 日、25 日にはエクスカーションとして新潟県の村上市、阿賀町などに出かけた。

研究発表

口頭発表では、次の 7 つのセッションが開催された。

Session A: Zoning and Planning

Session B: Forest Management Issues in Asia

Session C: Forest Inventory

Session D: Carbon Issue

Session E: Modelling Forest Growth

Session F: Spatial Modelling

Session G: Monitoring Using Remotely Sensed Data

以下、主なキーワード毎に口頭発表とポスター発表をあわせて、概要を報告する。

各国から国家森林資源調査システムに関して多くの報告があった：日本（吉田）、オーストラリア（Brack）、フィンランド（Tuula らの報告の前半）、韓国（Kim ら）。また、インドネシアの Jaya らは、高解像度衛星画像を中心に広域の森林資源調査システムを開発した。広嶋は減反率理論をもとに、県の収穫量の積算から将来の国の収穫量を推定した。

地球温暖化による気候変動による森林の挙動の変化予測には、従来の回帰モデルでは十分でなく、生理プロセ

スモデルの開発と応用が必要である。オーストラリアでのモデルの組み込み（Brack）、カナダでの地位指数への影響評価（Coops）、スギとブナ林での影響評価（光田ら）、フィンランドでのモデル開発（Mäkipää）、韓国での MC1 モデルの適用（Choi ら）が報告された。一方で、地上調査に基づいた欧州大西洋域森林での気候変動に対する造林戦略が報告された（Mason）。

炭素やバイオマス計測については、チーク材のバイオマス推定経験式の開発（Tiryana ら）、長期計測によるスギ林の成長量と林齢の関係（西園ら）、カラマツ 2 種の炭素量の比較（Yin ら）、地位と管理水準による炭素固定量推定（浅田ら）、立地環境要因のスギ・ヒノキ地位指数への影響（小谷ら）、が報告された。

計画分野では、気候変動時代の森林管理計画（Bettinger）と、地下水と森林管理を事例として線形計画法を用いて森林からの非市場産物の評価（Tarp）が報告された。また日本の伝統的建築物への木材の需要と供給での問題点を報告された（山本、佐藤）。

経営利用分野では、循環林道の計画手法（伊藤ら）、生産林の抽出（村上ら）、隣接林分の同時収穫の伐期への影響（當山）など、GIS を用いた分析が多く報告された。また、航空機 LiDAR と車載型地上 LiDAR を組み合わせた自動収穫システムの開発（Emde ら）では、3D のプレゼンが参加者の目を引いた。

リモートセンシングの分野では、ALOS によるイランでの立木密度推定（Fadaei ら）、QB によるスギ・ヒノキ分類（平田ら）、ALOS によるバングラディッシュでの森林被覆率（Zaman ら）、SPOT5 号による人工針葉樹林の抽出（露木ら）、熱帯地域でのリモセンの実務的利用の枠組み（鷹尾ら）、TM と GIS によるスギ林の更新モデル化（栗屋ら）、九州での伐採放棄地の抽出（村



写真-1 口頭発表会場の様子

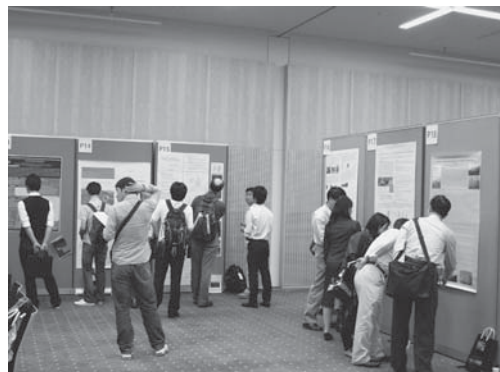


写真-2 ポスター発表会場の様子

上ら), 空中写真測量による森林モニタリング(米ら), が報告された。

熱帯については, 過去30年の問題と解決への取り組み(De Zoysa), 森林などの生態系の経済的・公益的サービスについて気候変動への順応と, 気候変動緩和策としてのREDDの必要性と実行上の問題点(Kanninen)がレビューされた。タイの保護林と地域住民の慣用的利用権(増野), タイの農家の経済状況の県毎の特性分析(野田ら), ガーナで森林周辺集落のアグロフォレストリーへの参加(Neil Cambellら)が報告された。

レクリエーション分野では, 八王子での活動内容と森林タイプの関係(井上), 台湾のエコツーリズムの管理問題(Linら), マウンテンバイクの森林でのレク利用での検討(武ら), が報告された。高校生への森林環境教育として空中写真立体的視の利用(田中ら), が提案された。

エクスカーシオン

1日目は朱鷺メッセを出発し, 新潟県の最北に位置する村上市に出かけた。最初に新潟県森林研究所を訪問し, 新潟県森林研究所で開発したえのきたけ, なめこ, ぶなしめじの品種について実物を見ながら説明を受け, 続いて, 松くい虫被害対策のために新潟県森林研究所で開発された松くい虫抵抗性マツ品種である『にいがた千年松』, スギ花粉症対策として開発された無花粉スギ品種について説明を受けた。森林研究所で弁当を食べたあと, 新潟県におけるスギ県産材生産地である旧山北町に向けて出発した。午後, 最初に中浜にある長期育成循環施業を行っている約90年生スギ林を見学した。この林分は下層に広葉樹の侵入を促進するため, 2006年に一部を間伐し, 2009年に残りを間伐する予定になっている。次に, 製材工場と集成材工場が一体化した複合施設

である「スギトピア岩船」を訪問した。この施設を営んでいる株式会社トーセンが国産材の安定供給を実現するために採用している「母船式木流システム」と「スギトピア岩船」の施設について説明を受け, 原木ストックヤード, 剥皮施設, 選別機, 製材工場, 乾燥施設, 集成材加工場という一連の工程を見学した。山北木材加工協同組合の山北プレカット第2工場に移動し, 横架材加工ライン, 柱材加工ラインを見学した。新潟市に戻る途中, 「喜っ川」に立ち寄り, 村上市特産塩引き鮭がぶら下がっているところを見ながら, 村上市における鮭の歴史や塩引き鮭の作り方の説明を受けた。また, この日はちょうど村上市の旧町人町一帯で「町屋の屏風祭り」が開催されていたため, 「喜っ川」でも屏風を見ることができた。

2日目は朱鷺メッセを出発し, まず新潟県阿賀町にある中ノ沢渓谷森林公園を訪問した。中ノ沢渓谷森林公園は森林環境教育, 木工体験教育, 森林レクリエーションなどのために作られた施設である。森林公園内にある森林科学館で施設の概要と森林公園の自然に関する説明を受け, 森林科学館の展示室を見学した。今回の研究集会ではスギ天然木から取った板にレーザーで文字を入れた名札を使用した, この名札を作成したレーザー加工機も展示室内で見学した。その後, 森林公園内を歩き, 見学用に整備された, かつて薪炭林として使われていた二次林, ブナなどの広葉樹植栽地, トドマツなどの針葉樹植栽地を見学した他, 公園内に点在する巨大なスギ天然木を観察したり, 林道沿いに生えているきのこなどの説明も受けた。展望台で森林公園を一望した後, 川べりで弁当を食べた。午後, 森林公園を出発し, 新潟市内にある北方文化博物館を訪れた。この博物館はかつての大地主が明治20年頃に建てた屋敷で, スギやケヤキなどの木材をふんだんに使った伝統的な木造建築物やかつての農村の人々の暮らしぶりを見た。

おわりに

今回の国際研究集会では, 気候変動に対して, 森林資源や森林計画の問題をいかに解決するかについて, 活発な情報交換が行われた。これまでは森林資源や計画は国内問題としての性格が強かったが, 地球温暖化という国際問題の中で, 互いに共通の問題として捉える傾向が強まったと感じた。IUFRO第4部会の国際研究集会は1991年10月につくば市, 2004年10月に宇都宮市でも開催されたが, 今回の国際研究集会ではこれまで以上に多くの方が参加した。研究集会組織委員会からは13名の外国人を招待したが, それ以外に海外から参加した方が33名もあり, 全体の参加者数を増加させた。発展途



写真-3 中ノ沢渓谷森林公園へのエクスカーシオン

上国の方でも自国で旅費の助成を受けて参加して下さった方が何人か見られた。2009年12月にデンマーク・コペンハーゲンでCOP15（第15回気候変動枠組条約締結国会議）の開催が予定されているが、その直前に森林管理の分野に関わる情報を日本から発信できたことは成果といえる。

今回の研究集会で発表された報告はプロシーディング

スではなく、Journal of Forest Planningの特別号として同誌編集委員会による審査を経た後、刊行される予定である。発表された報告の約半数がJournal of Forest Planningの特別号に投稿され、審査が開始されるところである。

本研究集会を開催するに当たり、IUFRO-Jからは研究集会事務局経費を助成していただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

IUFRO Conference on Gender and Natural Resources, S6.08.02 「Gender education in curricula of natural resources management-implicit and explicit!」に参加して

森林総合研究所男女共同参画室 塔村真一郎

はじめに

2009年9月7～9日に、カナダ、バンクーバー市のブリティッシュコロンビア大学(UBC)にて開催された国際会議に参加しました。本会議は、IUFROのDivision6 (Social, Economic, Information, and Policy Sciences)の中の、サブグループS6.08.02の「Education, gender and forestry (教育、ジェンダーと森林)」の国際会議として位置づけられ、今回は「森林カリキュラムにおけるジェンダー教育」をテーマに11件の発表と討論が3日間に渡って行われました。

本サブグループのコーディネータであるドイツ、フロイブルク大学のSiegfried Lewark教授が現在サバティカルスタッフとしてUBC滞在中ということで、UBCでの開催となりました。参加者は全部で20名程度。カナダ、ドイツ、オーストリアの大学、研究機関から数名、UBCのジェンダー教育専門家、森林系教職員スタッフ、ポスドク(アメリカ、インド、イラン、中国、

南アフリカの出身者)らが参加しました。

森林総合研究所にはジェンダーを研究テーマとして取り扱っている部署は現在ありませんが、2007年度より取り組んでいる文部科学省科学振興調整費女性研究者支援モデル育成事業(エンカレッジプログラム)での活動内容の紹介と、課題のひとつである「海外の森林系研究機関における女性研究者支援の現状調査」の協力依頼を兼ねて、男女共同参画室のスタッフとして参加しました。

会場となったUBCのForest Science Centreは、4回まで通しの吹き抜け空間と天井からの採光を取り入れたモダンなデザインの木構造で、大講義室や会議室、教職員スタッフの個室、廊下等の内装にもふんだんに木質材料を配した素敵な建物でした。

プログラム内容の概要

今回はサブグループ内の限られたメンバーによる会議でしたが、欧米諸国の森林系学部におけるジェンダー教



Forest Science Centreの外観



今回の会議のポスター



建物内の吹き抜けのホワイエ

育についての現状報告と今後の具体的活動についての検討に参加する貴重な機会を得ることができました。

初日はまず UBC 森林学部の副学部長の Cindy E. Prescott 教授による基調講演があり、森林学部の学部学生の女性比率は 1980～1990 代に 15%程度だったが 2000 年以降 35%を超え、現在は 40%となっている。現在の大学院学生の学生数は 261 人（男性 157 人、女性 104 人（約 40%））そのうちの半数以上が博士課程の学生で男性 90 人、女性 50 人、計 140 人とのことでした。森林系学部への女子学生の比率は年々高まっており、特に生物系、環境系で著しいとのことでした。（注；このような傾向は日本の森林科学系大学でも同様で、1985 年には 10%以下であった女子学生比率は、2005 年には学部生、大学院生ともに 3 割を越えるようになっていきます（丸田ほか 2006）。）一方スタッフ陣（教授、准教授）は、Forest Science 5/16（女性/全数）（女性割合 30%）、Forest Resources Management 1/18（1%）、Wood Science 1/14（7%）であり、女性スタッフのほとんどが生物学者とのことでした。

続いてコーディネータの Lewark 教授から、IUFRO に Gender and Forestry のユニットができて 9 年目に当たるとのことで、2002 と 2004 年に米国を中心としてカナダ、西欧諸国の森林系学部を対象に行ったアンケート結果の報告がありました。森林系学部でのカリキュラムにジェンダー問題（ここでは男女共同参画と解する）を取り入れているかとの質問に、19/32 が潜在的に（implicit）、9/32 が明示して（explicit）、4/32 不明との回答が得られました。また強制的に受講させているかとの質問には 14/32 が強制的に、12/32 は選択的に、6/32 は不明との回答でした。この結果から、森林教育

の中にジェンダー授業は限られており、ジェンダーについて教えることは特別なことであり、多くの人が女性だけの関心事であると考えられていると結論付けていました。しかし、日本においては一般の教養課程においてさえ、取り入れているところはごく限られた大学であることを考えると、欧米はかなり進んでいると感じました。

この調査での自由コメントには、「森林においてそもそもジェンダーはファクターではないから教育の必要はない（イギリス）」、「教授陣が男性ばかりなのでジェンダーを入れようがない（フィンランド）」、「そもそも森林教育にジェンダーを入れるなんて聞いたことがない（イタリア）」、「今のところちゃんと取り上げる重要な問題とは扱われていない。森林・林業や木材産業界はいまだ男性ばかりでもっと女子学生が増え、古い世代の人たちがリタイアする頃には状況が変わるだろう（オーストラリア）」などの否定的な意見がある一方で、「コロンビアでは大学の授業に取り入れられており、多くの女子学生が卒業し、プロフェッショナルとして公機関、私企業で成功している」、「インドでは男性女性は農業や林業のコースにおいて同じように認められる機会を持っている」、「2006 年から学部や大学院でジェンダーと森林のコースがスタートした（ザンビア）」などむしろ発展途



発表者（左端 Lewark 教授、右端筆者）



ディスカッションタイム



筆者のプレゼンの様子

上国で前向きなコメントがみられました。

初日の午後から二日目まではドイツ、カナダ、オーストリアの大学教授からの報告で、やはり森林系学部への女子学生の比率は年々高まっており、特に生物系、環境系で著しいとのことでした。大学の森林系学部ではジェンダーの授業を必須あるいは選択科目として明示して (explicit) 入れるところもありますが、最近ではむしろ各個別の講義の中にどのようにジェンダー事項を潜在的に (implicit) 入れていくかの方が問われているようです。すなわち、講師陣へのジェンダー教育の方に視点が移されているとのこと。というのも日本と同様森林系の大学を卒業しても女性研究者が教授にまで上り詰める割合は非常に低く、何か大きなプロジェクトで素晴らしい仕事をしたとしても、女性の名前は那一員として載せられる場合が多い (メインではなくサブ的な扱いを受ける) など、依然として男性優位の風潮が見られるケースがあるようです。ただ、これら年配男性スタッフの教育 (意識改革) は難しく、ジェンダーというだけでフェミニズムだと毛嫌いする人も多く、男子学生の中にさえしばしば見られるとのことでした。したがって、ジェンダーを前面に出すのではなく多様性を受け入れることの重要性や現存する差別の解消 (これは性差別のみならず、民族、宗教、先住民、階層など様々な社会的差別を含む) という視点で、より自然な形で教育を行うべきだとの議論がありました。しかし、ディスカッションの中では、各国によって文化背景や宗教的な慣習などが異なっており、そう簡単ではないということもわかりました。

森林総合研究所の取り組み紹介

上述のとおり、森林総合研究所では2007年度から本年度までの3年間、「応援します! 家族責任を持つ女性研究者」というタイトルで女性研究者を支援するエンカレッジプログラムを実施しています。これまで家族責任を理由に研究継続を断念してきた女性研究者がいたことや、今この両立問題に直面している若い女性研究者を職場として積極的に支援するとともに、現在の所内の研究者の女性比率 (10%) を大学の森林系学部での女子学生比率 (30%) にまで高めることによって人材を活かすことが目標となっています。大きな柱は、1) 各種両立支援制度の改革、2) 育児・介護サポート体制の整備、3) ITによる遠隔会議システムの整備、4) 次世代育成 (啓発) 活動の推進の4つとなっており、これまでにつくばの本所と京都の関西支所で所内一時預り保育施設を開設したり、出張を軽減するためのTV会議システムを導入したり、セミナーやシンポジウムを開催して職員の

意識啓発や広報に努めてきました (詳しくは男女共同参画室HPをご参照下さい)。

<http://encr.ffpri.affrc.go.jp/index.html>

筆者は今回二日目の午後に、Supporting Activities for Women Researchers at FFPRI, Japan (森林総合研究所における女性研究者支援活動について) と題して、日本における男女共同参画の動きについて概観すると共に、このエンカレッジプログラムの内容を紹介しました。女性研究者を支援する事業は、科学技術分野の競争力を高め多様なニーズに対応させる施策の一つとして、日本における女性研究者が日本では圧倒的に少ない現状を改善するため、平成18年度から文部科学省が積極的に進めている政策実現型の事業ですが、質疑応答では、なぜ女性研究者だけを支援するのか? 男性 (パートナー) は何をやっているのか、家族責任がないのか? なぜ家族の誰かが親の介護をしないといけないのか? などの質問が相次ぎ、日本と欧米との基本的な家族責任についての考え方の違いを認識させられました。ただ、女性研究者の数はやはり少なく、ポジションが上がるに連れてより少なくなるという現状や、家庭においても家事や育児に関しては女性の方がより中心的な役割となる傾向は同じでした。ITの遠隔会議システムの取り組みについては、在宅で仕事が可能になるなら非常に興味があるといったご意見もいただきました。

また、日本の女性が寿命、教育水準、所得などを指標にしたHDI (人間開発指数) が高いにもかかわらず、社会的に権限をもつ地位につく割合などを指標にしたGEM (ジェンダーエンパワーメント指数) が異常に低いことに対する驚きと、それに対して国が事業として取り組んでいることに対する評価をいただきました。また、これまで欧米中心での活動だったが、これからはアジアにも目を向ける必要があるとのコメントもあり、今回の参加はそれなりに成果があったものと思いました。

エクスカージョン

最終日にはエクスカージョンとしてUBCキャンパスのすぐ隣にある森林を散策するエコツアーがあり、巨木が立ち並ぶカナダ天然林の変遷や自然更新の様子について、ツアーガイドを務めてくれた女子学生が丁寧に解説してくれました。時折立ち止まっては、環境系に女子学生が多いのはなぜか? そもそも男女の興味の対象の違いはどこから来るのか? なぜ女子学生は初対面でもすぐにおしゃべりが始まるのに、男性同士は黙っているのか? などといったようなジェンダーに関するディスカッションも行われなかなか楽しいツアーでした。



森林エコツアー



UBC 文化人類博物館の野外展示

さらに午後からはUBCキャンパス内にあるFirst Nations Longhouseというアボリジニー（カナダ先住民のこと）の文化を勉強する施設や、Museum of Anthropology（文化人類学博物館）の見学もあり、はるか頭上に見上げるウエスタンレッドシダーの巨木に彫刻されたトーテムポールなどがたくさん展示してありました。

おわりに

セッションの最後には本グループの次の目標として、ジェンダー教育に関する英語版データベース（専門用語

や教育法についての解説）をネット上で公開すること（すでにドイツ語版は完成している。以下URL）の提案がありました。

http://www.gender-curricula.eu/en_curricula_suche.php?gruppe=alle&lg=en&main=2

またeラーニングシステムを構築し、世界中の人がネットを通して学べるようにするとの提案もありました。

来年韓国で開催されるIUFRO大会でも引き続きセッションを企画しているとのことで、参加者の再会を期待して充実した3日間が無事終了しました。

アジア太平洋地域林業研究機関連合 (APAFRI) 第5回総会報告

森林総合研究所理事 大河内勇

はじめに

アジア太平洋地域林業研究機関連合 (APAFRI) は、アジア太平洋地域の森林資源の管理と保全のために、研究・技術開発能力を高めることを目的とした、アジア及び太平洋地域における林業研究機関の連合として、1995年2月に設立されました。1997年に設立総会が開かれて依頼3年ごとに総会が開かれてきましたが、本年(2009年)10月4日にクアラルンプールで第5回総会が開催され、森林総合研究所の代表として参加いたしましたので、ここに報告いたします。

APAFRIはIUFRO(世界林業研究機関連合)と連携関係にあり、APAFRIの議長がIUFRO-SPDC(Special Program for Developing Country)の地域コーディネータに選任されてきたなど、IUFROの地域組織として重

要な役割を担っています。

加盟国は地域ごとに分かれています。東アジアでは、日本2機関(森林総合研究所と国際農林水産業研究センター)、韓国1機関、中国5機関、台湾4機関。東南アジアでは、マレーシア10機関、インドネシア5機関(CIFOR含む)、フィリピン5機関、タイ2機関、ベトナム3機関、ラオス1機関、カンボジア1機関。南アジアはバングラデシュ2機関、ブータン1機関、インド10機関、ネパール1機関、パキスタン2機関、スリランカ1機関。そして太平洋地域は、オーストラリア3機関、フィジー2機関、ソロモン諸島1機関、バブアニューギニア1機関、アメリカ合衆国1機関となっています(APAFRIのウェブサイトより)。加盟機関の多い国は大学の加盟があるのですが、日本は大学の

加盟はありません。

APAFRI 役員会

2009年10月4日午後に行われる総会に先立って、同日午前中に役員会が行われました。日本からは選出された役員がいませんでしたが、オブザーバー参加は可ということなので、参加しました。ここでは総会の資料全部について、事前の意見交換が行われました。その中で、規程の変更の提案がありました。これは事務局を有する研究機関（現在はマレーシア森林研究所 FRIM）は、役員会のメンバーとなるという案です。APAFRI はもとも FRIM が中心となって生まれ、事務局と議長が FRIM から選ばれていたのですが、第4回総会で任期は2期までという規程に従い、議長がスリランカの Fernando 氏に移りました。この時、前議長は役員に残るという規程で、FRIM が役員に残りました。しかし、今回の改選で、議長が替われば FRIM は前議長の枠からはずれ、事務局があっても役員がないという可能性が出てきました。そのため、役員会と事務局は緊密な連絡が必要だと言うことで、提案され、了承されました。

APPAFRI 総会

午後の総会は、加盟機関のうち31機関の参加を得て成立し、開催されました。日本からも森林総合研究所の私と栗延氏（林木育種センター）、国際農林水産業研究センターの後藤林業領域長が参加しました。

(1) 第4回総会の議事録の確認

2006年7月31日にマレーシア連邦クアラルンプールで開催された第4回 APPAFRI 総会の議事録ですが、事前配布していたこともあり、特に異議なく承認されました。

(2) 議長活動報告

コンファレンス・ワークショップほかの活動は、2006年7件、2007年14件、2008年13件、2009年4件、セミナーや会議への参加は2006年10件、2007年6件、2008年7件、2009年2件ありました。ニューズレターの発行6回、アジア太平洋森林遺伝資源プログラム（APOFORGEN）の事務局、アジア太平洋地域の研究者住所録の作成（USDA 予算）、役員会の開催、木材科学の教育CDの作成、FRIM による事務局の維持とその活動、財政状況などが報告されました。

(3) 規約の改正

役員会で提案された事務局から役員を選出する件につ

いて承認されました。

(4) 新役員の選出と決定

始めに議長と副議長の選挙があり、FRIM が議長機関に、ICFRE（Indian Council for Forest Research and Education）が副議長機関に選出されました。この時点で、規程変更によって FRIM から役員を選出する必要がなくなりました。

次に役員の選出ですが、東アジア、東南アジア、南アジア、太平洋地域ごとに一機関ずつが選出され、さらに2機関が全体枠から選出されました。東アジア地域代表は韓国が2期終了していたので変更する必要があり、韓国から森林総合研究所を推薦する発言があり、選出されました。今後、アジア地域の研究活動の活性化に向けた努力を行っていきます。東アジアからは全体枠で中国1機関がさらに選出されています。結局選出されたのは以下の機関です。なお、役員名が入っていますが、機関単位なので異動があれば同じ機関の別の方に替わります。

議長	Dato's Dr. Abd Latif Mohmod-FRIM, Malaysia
副議長	Dr. G. S. Rawat-ICFRE, India
前議長	Mr Sarah Fernando-FD, Sri Lanka
役員	Dr. Isamu Okochi-FFPRI, Japan
	Prof. Simon Saulei-PNG-FRI, Papua New Guinea
	Dr. Aida Baja-Lepis-ERDB, Philippines
	Prof. M. Al Amin-IFES, Bangladesh
	Dr. Xu Daping-RITF, China
	Dr. Putera Parthama-FORDA, Indonesia

おわりに

APAFRI の活動については、ウェブサイトで見ることが出来ます。

<http://www.apafri.org/>

日本からは2機関の加盟しかなく、特に大学の加盟がありません。アジア諸国の研究能力が年々向上し、研究活動が活発化している中、日本が今後もアジア諸国と連携して研究を続けるためには、個別研究での対応だけでなく機関同士の連携が必要となるでしょう。アジア地域での継続的な研究を行っている機関は是非加盟をご検討ください。詳細に関しましては大河内までご連絡いただくようお願いいたします。

ルイス・アピオラーザ博士の日本訪問と講演会

森林総合研究所林木育種センター 中田了五

森林総合研究所林木育種センターでは、2009年8月にニュージーランドカンタベリー大学のルイス・アピオラーザ博士を日本にお招きしました。約2週間の滞在中、全国5カ所の会場での講演と日本の多様な森林の視察を行っていただきました。

この招聘は、海外の林業・育種先進国の大学や研究機関と連携により、林木育種事業・研究の高度化と一層の林木の遺伝的改良を押し進める目的で行われたものです。

アピオラーザ博士 (Dr Luis Alejandro Apolaza) は、カンタベリー大学の上級講師 (Senior lecturer, The New Zealand School of Forestry, College of Engineering, University of Canterbury) で、林木育種と量的遺伝学が専門です。チリ生まれで、チリ、ニュージーランド、オーストラリアで、林木育種事業・研究に携わり、2006年からカンタベリー大学で教鞭をとっておられます。また、IUFROのUnit 2.04.02 Breeding theory and progeny testingのコーディネータを勤めておられ、林木育種の世界的権威の一人です。

アピオラーザ博士には、以下の5カ所で講演会をお願いしました。

- 8月18日 茨城県日立市 森林総合研究所林木育種センター
- 8月19日 茨城県つくば市 森林総合研究所
- 8月21日 北海道札幌市 森林総合研究所北海道支所
- 8月25日 京都府京都市 森林総合研究所関西支所
- 8月26日 熊本県熊本市 九州森林管理局

講演会には、森林総合研究所の職員のほか、都道府県森林・林業研究機関・行政機関、民間林業会社、林野

庁、国有林、大学などから多くの参加者を集めました。

講演会では、ニュージーランドの林業・育種の簡単なレビューに引き続き、林木育種の最新動向に関する異なるテーマでの講演を行っていただきました。

アピオラーザ博士の講演はすべて英語で行われましたが、魅力的なプレゼンテーションスライドとともにゆっくりはつきり話していただき、専門的な内容を非常にわかりやすく講演していただきました。

上の講演会スケジュールをみるとわかるとおり、アピオラーザ博士には、日本をほぼ縦断していただきました。その間、茨城ではスギ検定林や茨城県林業技術センターのスギ採種園、北海道ではグイマツ×カラマツF₁の育種・林業や針広混交天然林、関西では北山スギ林業と吉野林業、九州では九州森林管理局森林技術センターの省力化林業試験地など、日本の森林・林業・育種に関する多くの視察を行っていただきました。

これら講演会と森林・林業視察の詳細については、林木の育種 No 233 (2009 10 月号) 26-29 ページと、森林総合研究所林木育種センターホームページ <http://ftbc.job.affrc.go.jp/html/kaigai/apolaza/apolaza.html> にも掲載していますので、あわせてご覧ください。

最後になりますが、ご多忙にも関わらず真冬のニュージーランドから真夏の日本に来てハードな日程を笑顔でこなしていただいたアピオラーザ博士と、講演会と森林視察でお世話になりました、森林総合研究所、同北海道支所、同関西支所、同林木育種センター、同北海道育種場、同関西育種場、同九州育種場、北海道森林管理局、九州森林管理局、九州森林管理局森林技術センター、北海道立林業試験場、茨城県林業技術センター、奈良県森林技術センター、奈良県南部農林振興事務所の関係各位と、南裏種苗園と岩井吉彌先生に対し、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



IUFRO-J News No. 98 平成 21 年 11 月 30 日
 国際森林研究機関連合 - 日本委員会事務局
 〒 305-8687 茨城県つくば市松の里 1
 森林総合研究所 国際連携推進拠点
 TEL 029-829-8327, 8328
iufro-j@ffpri.affrc.go.jp [編集・発行]